不登校児童・生徒支援事例報告書

校内別室指導支援員の取組について

不登校児童・生徒の状況

海外や私立学校からを含め、編入学・転学生徒が年間 15 名～20 名と比較的多い学校であり、本校の不登校や不登校傾向の出現率は高い状況にある。その半数は、小学校や編入学・転学前の学校から引き続いている状態である。また、本校では多様な生徒を支援するため通常学級の他に、特別支援学級、特別支援教室、日本語教室がある。

具体的な取組

私立中学校から４月に転入学してきた中学校３年生は、長く不登校であったため、本校に籍は置くが登校はせず、適応指導教室に通う予定であったが、不登校対策委員会では、別室登校を促していく方針となった。１学期後半、登校が減少したが、９月に校内別室指導支援員による支援がはじまると再び登校日数が増加した。

小学校５年生から不登校である中学校１年生は、大学生の校内別室指導員とは気兼ねなく交流できるようになり、将来像や希望進学校を伝えられている。また、週２回設営される「校内居場所」にも顔を出したりして、居場所運営の大人と共にゲームに興じている。

海外から２学期途中に編入学した中学校３年生は、現地では、日本で学ぶ教科の内容ではなく、日本語も全く分からない状況であったため、不登校を防ぐ観点で日本語教室での指導を基に、校内別室指導支援員と一対一で日本語と国語の学習に取り組んでいる。

教室への入りにくさを抱えている中学校１年生は、校内別室では、他の生徒と一緒に過ごせるので、大部屋で校内別室指導支援員の支援を受けつつ、ある日は、社会（ワーク）→英語（テスト）→理科（オンライン視聴）と授業に取り組んでいた。

成果

不登校生徒が登校しても、授業がある教員は、時間的制約があるため、登校した生徒が自学自習を行う時間が生じていた。現在は、14 名の大学生が分担して校内別室指導支援員として勤務していて、いつ登校しても自立を図る個別支援が可能となった。

課題

①全授業時間に必ず支援員を配置。②外国語など、よりその生徒に対応できる支援員を配置。③報告書以外に教員との情報共有の実施。